

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02779

研究課題名(和文)近代語文法の体系的研究

研究課題名(英文)A systematic study of modern Japanese grammar

研究代表者

青木 博史(AOKI, Hirofumi)

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：90315929

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語史上における近代語(室町期～江戸期)にスポットを当て、現代語文法が確立していく様相について明らかにした。具体的には、準体助詞「の」、可能動詞、テ形補助動詞、丁寧語といった、現代語へとつながる重要な文法現象を取り上げた。分析にあたっては、現代語研究において発達した理論的研究をふまえ、用例に基づいた実証的研究を行った。いつ、なぜ、どのような変化が起こったのか、説得的な説明を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、文献学的研究をふまえた実証的な日本語史研究であるが、理論的研究の成果を参照することで、一般言語学への貢献につながるものとなっている。特に、「文法化」や「歴史語用論」など、他言語のデータに基づいて構築された手法を視座に収めることで、新たな歴史叙述を可能にした。日本語は、世界でも指折りの豊富な歴史文献資料を有しており、文法変化をダイナミックに描いた本研究は、世界の言語学に多大なインパクトを与えるものと言える。

研究成果の概要(英文)：In this study, we focused on the modern Japanese language (Muromachi to Edo period) in the history of Japanese and clarified the aspects of the establishment of modern language grammar. Specifically, I took up important grammatical phenomena that lead to modern language, such as the quasi-form particle "no", possible verbs, te-form auxiliary verbs, and polite language. In the analysis, empirical research based on examples was carried out based on the theoretical research developed in modern language research. We gave a convincing explanation of when, why, and what kind of change occurred.

研究分野：日本語史

キーワード：近代語 文法化 歴史語用論 歴史統語論

1. 研究開始当初の背景

従来の近代語文法研究は、個別的な語法研究の域を出ないことが多かった。たとえば、準体助詞「の」の研究にしても、述語の項として用いられる場合のみから結論されることがほとんどである。しかし、「の」は、「のに」「ので」「のなら」や「のだ」「のだらう」など、助詞・助動詞として用いられる場合も認められるのであるから、これらも視座に収めて体系的に記述する必要がある。

また、「の」という形式自体が見られ始めるのは近世初期からであるが、完全に定着するのは明治期に入ってからである。すなわち、語の成立と、文法体系への定着には、異なる段階が認められるのであり、この点に注意しながら歴史を描くことが必要である。そして、このように、現代語において重要な役割を果たす文法語が、明治期に入ってから定着するようになる事例は数多く存する。近代語、それも特に江戸中後期から明治期に注目する必要性が、ここに認められる。

文法変化を記述するにあたっては、なぜ、どのようにして当該の変化が起こったのかを、必要十分な形で説明することが望まれる。したがって、「文法化」など、他言語の観察から得られた研究成果は有用である。もちろん、他言語で起こった歴史変化が、必ず当該の言語でも起こるとは限らないが、同じ方向への変化の蓋然性は認められてよい。一方で、歴史は一回的な出来事であることも念頭に入れる必要があり、普遍性と個別性に十分に注意を払いながら記述を進めることが望まれる。

また、歴史変化を記述するにあたっては、当時の人々の言語使用意識にも留意する必要がある。言語は人間が使用するものであるから、使用する人間の側からかけ離れた、あまりに理論的にすぎる解釈は、言語変化を説明するものとして妥当なものとは言えない。これは、近年クローズアップされている「歴史語用論」に通ずる見方である。こうした新しい記述の枠組みを、積極的に採り入れていく。このような記述のスタンスは、著書『日本語歴史統語論序説』(ひつじ書房、2016年)においていくらか示したが、本研究では、これを発展的に継承する。

2. 研究の目的

本研究は、日本語史上における近代語にスポットを当て、現代語文法が確立していく様相について明らかにすることを目的とする。江戸中期から明治大正期にかけての近代語研究は、多様な文献資料が存することもあり、従来は、当時の言語の実態を明らかにするための共時的研究が主であった。一方で、室町期から江戸前期にかけての近代語研究は、古代語から現代語への過渡期として通時的観点からの考察が主となっている。本研究では、これらの研究を繋ぎ、歴史変化をダイナミックに描くものとする。現在、世界の言語研究において歴史的研究は注目を集めており、豊かな日本語史研究の成果の蓄積をふまえた本研究は、世界の言語学に大いに貢献しうるものとなる。

近年における、コーパス言語学の発達とともに、日本語の言語データも多くがコーパス化され、用例収集・分析に関する作業効率は飛躍的に上昇してきた。特に、国立国語研究所が開発を進めている『日本語歴史コーパス(CHJ)』は、形態論情報付きテキストであり、文法研究にはきわめて有用である。共同研究プロジェクト研究員という立場を活かして様々な情報を得ながら、同時に、これらのデータベース構築に貢献できるような記述を行っていく。

3. 研究の方法

(1) 理論と実証のバランスを意識した研究

本研究の特色は、現代語研究において発達した理論的研究をふまえ、用例に基づいた実証的研究を行うという点にある。従来の伝統的な日本語史研究では、文献資料の調査データを示すことこそが最も重要で、過度の一般化は戒められてきた。しかし、歴史叙述はデータを並べるのではなく、研究者の解釈を示すことに他ならない。積み重ねられてきた記述の成果を参照しつつ、どこまで一般化・抽象化が可能であるかを見極めながら、理論と実証のバランスのとれた記述を進めていくことで「国語学」の枠にとどまらない、一般言語学への貢献につながる成果が上がることとなる。

(2) 他言語を視野に収めた研究

「文法化」や「歴史語用論」などが示すように、他言語のデータに基づいて構築された説明の方法が、日本語研究を活性化することはしばしば認められる。実際、その内実は、すでに日本語研究の世界では分かっていることも多いが、説明の蓋然性が上がることは疑いない。そしてそうした他言語による成果は、日本語の事例に単に当てはめるだけではなく、日本語からそれらの成果を問うようなものでなければならない。日本語は、世界でも指折りの豊富な歴史文献資料を有しており、歴史的観点からの記述も多くの蓄積がある。日本語研究から積極的に成果を発信することにより、理論の補強あるいは修正といった形で学界に多大な影響を与えることが可能となる。

(3) 通時論・共時論をふまえた研究

本研究は、歴史変化の動態を描くことを謳っているが、文法体系そのものの動態を観察する

ことは難しい。体系は特定の時代にしか認められないからである。そのことをふまえた上で、特定の文法範疇における歴史変化を「文法史」と見なし記述していくわけであるが、これは共時的観点からの観察の積み重ねなしでは成り立たない。体系的な視点から、共時態の観察・記述を行ったうえで、通時態の説明へと研究を進めていく。

(4) 文献学的研究と一体となった言語研究

言語史研究において文献資料が必要であることは言うまでもないが、まずは資料の正確な理解が必要である。当該の言語事象が、資料の性格とどのように関係し、どのように反映しているのかを考慮しなければならない。近年、野村剛史『日本語スタンダードの歴史』(岩波書店, 2013年)、田中牧郎『近代書き言葉はこうしてできた』(岩波書店, 2013年)など、室町期・近世期・明治期のどの位相の言語がいわゆる標準語へとつながっていくのか、歴史叙述をどのように行うべきかを示した興味深い研究が、次々に発表されている。これらの成果を参照しながら、具体的な文法現象に基づいて考察を進めていく。

4. 研究成果

(1) 準体助詞「の」

準体助詞「の」は、節を名詞化するための形式として生じたものであるが、その発達は「の」に「ので」「のだ」など、接続助詞や助動詞の形が重要であり、「文法化」「構文化」などの観点が欠かせない。また、こうした文法語の歴史的発達の経緯は、「語用論的推論」や「語用論的強化」の過程であると言える。この成果は、従前の著書『日本語歴史統語論序説』(ひつじ書房, 2016年)においても述べたが、今回、論文「「のなら」の成立 条件節における準体助詞「の」(『日本語条件文の諸相』くろしお出版, 2017年)の他、共編著『歴史語用論の方法』(ひつじ書房, 2018年)所収の論文「準体助詞「の」の発達と定着 「文法化」の観点から」において、「歴史語用論」の観点を交えながら詳しく述べた。

「歴史語用論」は、この後の自身の研究において重要な観点となった。『日本語学』41-3(明治書院, 2022年)の「特集：日本語の語用論」において、論文「語用論と日本語史研究 「評価的意味」をめぐる」を発表した他、『国語国文』91-11(京都大学, 2022年)の「後期中世語特輯」において、「抄物資料による日本語史研究の展望 歴史語用論の観点から」を発表した。いずれも、歴史的研究における語用論的観点の有用性を説いたものである。

(2) 可能動詞

「読める」「書ける」などの可能動詞は近世初期に成立し、近年は「見れる」「食べれる」などの「ら抜き言葉」を生み出している。この形式の成立・伸長の様相については従前の著書『語形成から見た日本語文法史』(ひつじ書房, 2010年)で述べたが、今回、論文「可能表現における助動詞「る」と可能動詞の競合について」(『バリエーションの中の日本語史』くろしお出版, 2018年)において、可能表現体系という視座から俯瞰的に述べた。

ヴォイスを捉える視点は、受身・可能から使役へと展開し、論文「日本語使役文の用法と歴史的变化」(『筑紫語学論叢』風間書房, 2021年)を発表した。上代から現代までを視座に収めたダイナミックな論であるが、近代語における「非情の使役」の発達は、欧文翻訳を契機としたものであり、文体論的観点からも興味深いものと言える。

(3) 丁寧語

日本語の敬語史は、素材敬語から対者敬語への変化として描かれる。すなわち、「尊敬語」「謙譲語」の運用が重視された古代語から、「丁寧語」が発達した近代語への変化であるが、本研究では、まず、丁寧語成立前夜とも言える中世室町期における「ござる」について、論文「「ござる」の丁寧語化をめぐる」(『日本語文法史研究4』ひつじ書房, 2018年)を発表した。これを承け、近世以降の「ます」「ございます」「です」の成立・発達について、共著『文法化・語彙化・構文化』(開拓社, 2020年)において詳しく述べた。待遇表現体系という観点はもちろんであるが、文法化の観点を中心に述べたところに、本研究の特色がある。

(4) 複合動詞

日本語の「動詞連用形+動詞」型複合動詞の歴史については、従前の論文「複合動詞の歴史的变化」(『複合動詞研究の最先端』ひつじ書房, 2013年)などで詳しく述べたが、今回、Bjarke Frellesvig氏との共著論文「Verb verb complex predicates in Old and Middle Japanese」(『Verb-Verb Complexes in Asian Languages』Oxford University Press, 2021年)を発表し、世界に向けてその成果を発信した。

また、近代語以降、「動詞テ形+動詞」型複合動詞が発達する。いわゆる「テ形補助動詞」の成立であるが、あらためて通史的観点からその全貌を明らかにした。論文「動詞連用形+動詞」から「動詞連用形+テ+動詞」へ 補助動詞の歴史・再考 (『日本語文法史研究5』ひつじ書房, 2020年)の他、論文「補助動詞の文法化 「一方向性」をめぐる」(『日本語文法』19-2, 日本語文法学会, 2019年)、論文「「て+みせる」の文法化」(『構文と主観性』くろしお出版, 2021年)などを発表した。個々の事例から一般性の高い記述を導き、一般的・体系的な観点から個別の形式における説明を行った。

(5) 歴史コーパス

上記(1)～(4)に示した成果はいずれも『日本語歴史コーパス』を使用したものであり、主要な歴史文献資料における用例の収集から、各成分の共起関係の分析に至るまで、その恩恵に与っている。本科研の最終年度には、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」(代表者：小木曾智信)と連携し、共編著『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』(ひつじ書房, 2022年)を刊行することができた。自身も、論文「文相当句の名詞化」を収載し、従来の方法論では導くことのできなかった、新しい見方を示すことができた。

(6) 著書の出版

本科研は、本来、2017年度から2020年度までの4年間の予定であったが、新型コロナの影響から2022年度まで延長された。しかし、結果的に、研究計画調書を作成した段階で予定していた具体的な研究内容は2020年度までにすべて成果として発表し、2021年度以降は、それらの研究を進める中で得られた新たなテーマについて研究を行うことができた。

特筆すべきは、この6年間の間に、編著と共著を合わせ、計7冊の著書を刊行できたことである。『歴史語用論の方法』(ひつじ書房, 2018年)の刊行は「歴史語用論」の有用性を学界に定着するに十分であったし、隔年刊行の論文集『日本語文法史研究』(ひつじ書房)と合わせ、『日本語文法史キーワード辞典』(ひつじ書房, 2020年)の刊行は、「日本語文法史」という分野の活況ぶりを、学界に印象付けるに十分な役割を果たすことになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 青木博史	4. 巻 91-11
2. 論文標題 抄物資料による日本語史研究の展望 歴史語用論の観点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 2-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木博史	4. 巻 6
2. 論文標題 文法史の名著：湯沢幸吉郎『室町時代の言語研究』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語文法史研究（ひつじ書房）	6. 最初と最後の頁 239-248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木博史	4. 巻 41-3
2. 論文標題 語用論と日本語史研究 「評価的意味」をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 66-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木博史	4. 巻 -
2. 論文標題 文相当句の名詞化	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 コーパスによる日本語史研究 中古・中世編（ひつじ書房）	6. 最初と最後の頁 89-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木博史	4. 巻 -
2. 論文標題 「て+みせる」の文法化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 構文と主観性（くろしお出版）	6. 最初と最後の頁 203-220
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木博史	4. 巻 5
2. 論文標題 「動詞連用形+動詞」から「動詞連用形+テ+動詞」へ 補助動詞の歴史・再考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語文法史研究（ひつじ書房）	6. 最初と最後の頁 197-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木博史	4. 巻 -
2. 論文標題 日本語使役文の用法と歴史的变化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 筑紫語学論叢（風間書房）	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hirofumi Aoki and Bjarke Frellesvig	4. 巻 -
2. 論文標題 Verb verb complex predicates in Old and Middle Japanese	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Verb-Verb Complexes in Asian Languages	6. 最初と最後の頁 44-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 青木博史	4. 巻 19-2
2. 論文標題 補助動詞の文法化 「一方向性」をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 18-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木博史	4. 巻 -
2. 論文標題 可能表現における助動詞「る」と可能動詞の競合について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 パリエーションの中の日本語史(くろしお出版)	6. 最初と最後の頁 197-214
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木博史	4. 巻 -
2. 論文標題 準体助詞「の」の発達と定着 文法化の観点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史語用論の方法(ひつじ書房)	6. 最初と最後の頁 141-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木博史	4. 巻 4
2. 論文標題 「ござる」の丁寧語化をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語文法史研究(ひつじ書房)	6. 最初と最後の頁 155-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木博史	4. 巻 -
2. 論文標題 「のなら」の成立 条件節における準体助詞	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語条件文の諸相（くろしお出版）	6. 最初と最後の頁 139-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木博史	4. 巻 37
2. 論文標題 非変化の「なる」の史的展開	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国語語彙史の研究（和泉書院）	6. 最初と最後の頁 325-338
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木博史	4. 巻 14巻1号
2. 論文標題 書評：森勇太著『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語の研究	6. 最初と最後の頁 50-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 歴史的観点から見た「青い目をしている」構文
3. 学会等名 第294回筑紫日本語研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 補助動詞と軽動詞 古典語の「スル」
3. 学会等名 第10回「言語変化・変異研究ユニット」ワークショップ
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 日本語史における文相当句の名詞化
3. 学会等名 「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話に基づく言語変化・変異メカニズムの探求（東京外国語大学AA研共同利用・共同研究課題）」研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 「なので」の成立
3. 学会等名 第283回筑紫日本語研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 抄物の接続詞 文献資料と言語史
3. 学会等名 「抄物の文献学的研究」講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 接続詞と文法化 中世後期「抄物資料」を中心に
3. 学会等名 第4回「日本語と近隣言語における文法化」ワークショップ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 丁寧語の発達
3. 学会等名 平成30年度九州大学国語国文学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 「補助動詞」の文法化 「一方向性」をめぐって
3. 学会等名 日本語文法学会第19回大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 「動詞連用形 + 動詞」から「動詞連用形 + テ + 動詞」へ 「補助動詞」の歴史・再考
3. 学会等名 シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア 文法史研究・通時的対照研究を中心に」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 「て+みせる」の文法化
3. 学会等名 第277回筑紫日本語研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 補助動詞と文法化
3. 学会等名 第3回「日本語と近隣言語における文法化」ワークショップ
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 日本語における「使役」文の歴史
3. 学会等名 関西言語学会第42回大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 日本語使役文の用法と歴史変化
3. 学会等名 第4回「言語変化・変異研究ユニット」ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 「テ形補助動詞」の“文法化”について 「一方向性の仮説」をめぐって
3. 学会等名 第2回「日本語と近隣言語における文法化」ワークショップ
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 青木博史・小柳智一・吉田永弘(編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 日本語文法史研究 6	

1. 著者名 青木博史・岡崎友子・小木曾智信(編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 340
3. 書名 コーパスによる日本語史研究 中古・中世編	

1. 著者名 小川芳樹・石崎保明・青木博史	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 312
3. 書名 文法化・語彙化・構文化	

1. 著者名 青木博史・小柳智一・吉田永弘(編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 312
3. 書名 日本語文法史研究 5	

1. 著者名 青木博史・高山善行(編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 164
3. 書名 日本語文法史キーワード辞典	

1. 著者名 窪園晴夫, 高見健一, 渋谷勝己, 長屋尚典, 杉岡洋子, 上山あゆみ, 定延利之, 松井智子, 青木博史, 広瀬友紀, 小泉政利, 秋田喜美, 松岡和美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 232
3. 書名 よくわかる言語学	

1. 著者名 高田博行・小野寺典子・青木博史(編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 歴史語用論の方法	

1. 著者名 青木博史・小柳智一・吉田永弘(編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 308
3. 書名 日本語文法史研究4	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------